

戦前しめ飾り再現

宮城県丸森町で戦前まで正月に作られていたという鳥居型のしめ飾りを、同町出身のわら細工職人、荒川美津三さん(88)「川崎市多摩区」らが完成させ、星川杉山神社(横浜市保土ヶ谷区)の社殿前の参道に設置した。鳥居のような立派なしめ飾りは、来月13日まで設置され、参拝客を華やかに迎える。

【国本愛】

横浜・星川杉山神社 来月13日まで

荒川さんは、伝統技術め飾りをほれぼれと見上を後世に伝える「民具製作技術保存会」(川崎市多摩区)で指導しており、保存会の4人が協力した。境内から竹を切り出して束ね、高さ約3メートル、幅3・4メートルの支柱を2本設置。約2・4メートルの高さで橋渡しし、中央にわらを扇状に広げた飾り付け、鳥居型のしめ飾りを組み上げた。

さらに、縁起を担ぐと、支柱に松と梅の木を付けて「松竹梅」をそろえ、支柱を束ねる縄も「七五三」となるよう七重、五重、三重に巻き付けた。「初めて見たのに懐かしい」。同神社の権柄宣、平岡理恵さん(36)は、し

古里の鳥居型 後世に

宮城出身の荒川さん



あかしめ飾りを、もう一つつけた。今月、保存会メンバーらと、この絵本作持ち続けた。そんな中、全国のしめ飾りをのせた絵本と出合い、偶然ふるさとのもの夢をかなえよう」と意見がよく似たしめ飾りを見がまとまり、保存会に所属する神楽師の倉谷仙太郎さん(56)が同神社に相談を持ちかけ、実現に至った。

荒川さんはしめ飾りを眺め、「昔一緒に作った兄弟や親の顔を思い出した。一度は途絶えた伝統だが、これから受け継いでもらえるよう、来年も再来年も続けたい」と目を細めた。

再現された戦前のしめ飾りの前に立つ荒川さん(中央)ら—横浜市保土ヶ谷区で